

るを得まい。今度こそ、我が艦隊が海戦に慣れぬ敵船をことごとく葬り去つてくれる。これに必要な物資・軍資金なら、存分に届けようぞ」

独り崖っぷちに立たされた火瓊瓊杵は、呉から戦災を被りたくなかったのか、それとも呉の太伯や夫差の子孫らと好を深めたかったのか、この使節に見えて呉に与する道を選んだ。

この直後、火瓊瓊杵は臨戦体制をとって川内城（川内市）に立てこもり、選りすぐった遊撃隊を次々と北進させた。本軍も菊池平野の敵を蹴散らしながら、怒涛の勢いで筑紫平野へなだれ込んで行った。

「倭人伝」、「奴国ありて、これ女王国の境界の尽くる所なり。南の狗奴国は男子を王と為す。女王に属さず」

☆後世の古墳から出る赤烏五年・七年（二四四年）銘の呉鏡は、この時の宝物らしい。

● 内部抗争

平和慣れした邪馬台国軍は日前軍を目の当たりにするなり、一目散に逃げ散った。敵が近づいてきたと耳にしたらだけで、砦を空にする部隊もあった。邪馬台国にとって、戦況は日増しに悪化していた。

ヒミコは多大な犠牲と戦費に耐えかね、魏に何度も求援をせつつあったが、魏は呉や蜀漢と食うか食われるかの戦争に明け暮れ、国内でも司馬氏との間で泥沼の権力争いを繰り返していたから、倭に出兵する余裕など微塵もなかった。

その間、ヒミコは瀬戸内や畿内の軍勢を副都（吉野ヶ里）に送り込んだり、朝鮮半島に送った将兵を連れ戻すなどして防戦に努めたが、破竹の勢いの敵を跳ね返すことはできなかった。それどころか、頼みの綱だった副都の守備軍が敵にあっさり跪いたのだ。

二四五年、ヒミコは帯方郡に遣いをやって、再度の援軍を要請した。だが、太守はこの使節に詔・黄幢の授与を約束して、その威光の下で和睦しよう諭すだけだった。

「倭人伝」、「その六年（二四五年）、詔して倭の難升米に黄幢を賜い、郡に付して仮授せしむ」この時、南朝鮮の韓人らが通訳の手違いから帯方郡にあがない、太守を戦死させる事件が起きた。詔と黄幢が帯方郡に留め置かれたことで、邪馬台国側は不安に陥った。やがて、それが戦争責任の追求に様変わりし、ついで身内同志の権力闘争へと発展した。ことの発端は、ヒミコの即位時に遡る。その時の取り決めでは、

一、ヒミコは、天つ神たちを従えながら政務を見る。

一、日高見の天火明は東勢の上に立ち、日前の後詰となれ。いずれ大倭大国玉を兼ねさせる。という約束だった。ところが、ヒミコの権勢が強まるにつれ、太氏や大倭国らは先祖伝来の銅鐸をないがしろにする一方で、八咫鏡をヒミコのごとく拝み倒して女王の臣下同然になっていた。

天火明は常々これに不満を隠し持っていた。今回も、天火明の頭越しに講和がまとまる事態で落着くと、火瓊瓊杵が次の倭王に立つのは目に見えていた。天火明はこの件で頭を悩ませてきた。権勢欲を高ぶらせる日高見勢も自らの推す倭王を担ぎたい一心から、どこまでも天火明を支持していた。

「ヒミコは祀りごとに熱中し過ぎて、今日の事態を招いた。こうも悪化しては、天火明に権力を譲り渡す他になかろう」

当のヒミコは、夫の御霊を祀っておれば国が丸く治まるものと信じて、ひたすら檜御柱と磐座のもとに跪いては、十握剣と天璽の剣を使い分けながら、高皇産霊や天照大神の祭祀に没頭していた。

これに対して、大倭厳・海部氏・三輪氏までが、

「なぜ水徳国で、日の神である高皇産霊を真つ先に祀らねばならぬのか」と不満を漏らすようになった。天火明はこの混乱に乗じて大倭巖を味方に引きずり込むと、武器をちらつかせてヒミコに退位を迫るまでになった。

この時を境に、ヒミコの下で一家にまとまっていた天勢と巖勢が、事あるごとに反目し始めた。ヒミコが素戔嗚・大己貴・大神氏・磯部氏らを結集して天火明勢や尾張勢に立ち向かうと、都中がたちどころに戦場と化し、宮殿から火の手が舞い上がった。戦火は周辺国へと飛び火した。すると、天火明配下の尾張勢は在地の守りなどそっちのけにして都に大軍を送り込んできた。

ヒミコは宮殿を焼かれた上に身の危険まで感じたことで、三輪山麓の笠縫邑かさぬいむらに上之宮を移した。ついで、そこに檜御柱を立て、四周に磐座を配して禁足の聖域と定めるや、高皇産霊・天照大神・石神の御霊を奉じながら、ひたすら加護を祈っていた。侍女の豊鍬入姫とよすきいり（天火明の娘）も、十握剣と天叢雲剣を交互に祀ってヒミコの無事を願い続けた。

二四七年、魏は帯方郡に新しい太守を送って韓人の乱を鎮めると、帯方郡吏張政らを倭に派遣して先の詔書と黄幢を届けさせた。と同時に、檄文を付して和睦するよう告諭してきた。

その檄文とは、「ヒミコを守り通す決意を見せつけた上で、天火明・火瓊瓊杵双方が調停に応じなければ、公孫淵同様、大軍を差し向けてでも討伐する」という脅しだが、この通告ではなかったか。

実際には、これが大いに効を奏した。というのも、火瓊瓊杵は魏内部の権力争いなど知る由もなかったから、これを額面どおりに受け取った。折も折、呉が二流の艦船にわずかな物資を積んだだけで日前にやって来たことでも、火瓊瓊杵はこの告諭を受け入れる他になかった。

ヒミコも天火明憎しでこり固まっていたから、火瓊瓊杵と和睦して西海部隊をこぞって呼び戻し、その予先を天火明勢・尾張勢に向けたいと念じていた。以後、双方の利害が一致することで、

ヒミコは火瓊瓊杵と手に手を取って、新しい天下づくりりに邁進することになる。

「倭人伝」、「其の八年（二四七年）、太守王頌おうき、官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼ヒミコヨ（天孫）と素もとより和せず。倭の載斯・鳥越などを遣わして郡に詣らしめ、相攻撃するの状を説く。塞曹掾史張政等を遣わし、よつて詔書・黄幢を難升米に拝受せしめ、檄をつくりてこれを告諭す」

晴れて権力を奪還できたヒミコは、天火明と天香山の親子、それに日高見・大倭厳・尾張海部家の首謀者らを東国へ追い払う一方、大倭国に対しては服従を誓わせるだけに止め置いた。こうした経緯から、ヒミコは火瓊瓊杵長子の火照（海幸彦）に以下の詔を降すことになった。

一、日の神と火神の双方を兼ね、天火明の家督と天璽（天鹿兒弓と羽羽矢）、それに瑞宝十種を引き継げ。

一、日向の天（日）勢を率いて上洛し、大倭ひのちとに日本の倭やまと（日本）家やまとを興せ。同時に、日本家・大神家双方の家長を兼ねる日本大物主大神やまとに就任し、私亡き後、日本王朝やまとを興せ。

一、祭場での日本の座は、日の祭壇を奥にずらして空いた所とせよ。

一、宗像家や葦原中つ国一門の中から選りすぐった妃を迎えること。

ついで火瓊瓊杵、常陸に追い払った日高見勢、都に取り残された天火明の兒らにも詔した。

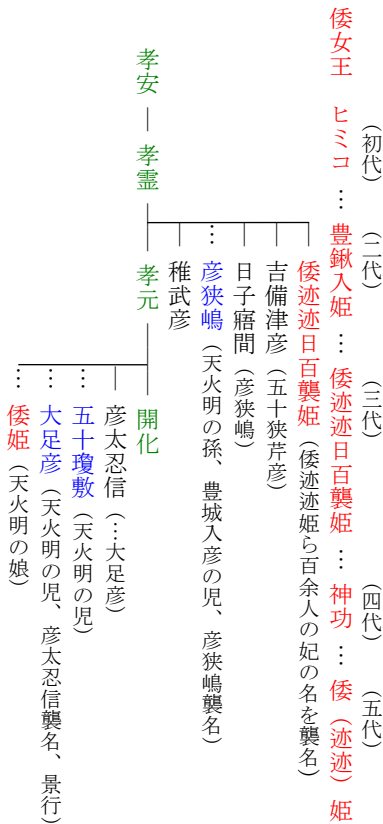
一、火瓊瓊杵は倭王を断念する代わりに、一代限りの和やまと王と称するがよからう。

一、祭場での日高見の席は、最後列の立席（日立）とする。（先祖祭祀の場に顔を出すな意）

一、天火明家を廃絶する。天火明の実子は、豊系や大倭家の養子となつて沙汰を待つておれ。

暫くすると、豊城入彦・豊鍬入姫が豊系の家に入った。日葉酢姫の兒、五十瓊敷・大足彦・倭

姫（いづれも天火明の児）も、豊城入彦の児（孫？）・彦狭嶋も、大倭家の孝霊・孝元の家系に分散して入籍することになった。



この直後に、ヒミコの勅使が天璽の天鹿兒弓・天羽羽矢、それに瀛つ鏡・辺つ鏡など瑞宝十種を奉じて薩摩吾田に急行し、海幸彦（火照）に以下の詔を伝えた。

一、彦火明を襲名せよ。

一、出雲に立ち寄り、大己貴を連れて参れ。

一、火闌降は、海幸彦の名と家督を継げ。「僕は、今より後は、汝命の昼夜の守護人となりて仕え奉らむ」という誓約も、新たに海幸彦となる火闌降が守り通せ。

☆日本とは、日神を祀る祭壇のあった所の意で、これが日本家や日本国の名の由来となった。

その後、東国に走った天火明親子・日高見勢・大倭敵勢、それに尾張勢はどうなったのか。天火明勢・日高見勢は関東の信太（茨城県）へ逃げた。彼らはそこでも日高見国と名のつて、

「日高見の信太こそ、天竺の教義をかなえる常陸だ」と言い張っていた。これに対して邪馬台国方は、「祭祀に同席できない日立の常陸だ」と言つて蔑んだ。これが常陸国の名の由来であろう。こうした経緯から、造反組の尾張勢も東国に散らばって生き抜くことを強いられた。その結果、関東のあちこちで尾張色の濃い文化や土器が根づくことになる。

『日本書紀』、「少彦名命、行きて熊野の御碕に至りて、遂に常世郷にいでましぬ」

『常陸国風土記』、「古えの人が常世の国と呼んだ神仙郷は、この地（信太）ではないか」

『日本書紀』や万葉集引用の『常陸国風土記』逸文、「この地（信太）は、もと日高見・・・」

● 火明饒速日の天降り

大己貴は自ら情熱と真ごころを込めて帝王教育まで施した天火明が、ヒミコに背いたことで心を痛めていた。そのことで、二度と国政に関わるまいと決意して職を辞し、出雲の片田舎に引きこもっていた。その彼も月日が経つと、昔を思い出しては愚痴まじりの自慢話を始めた。

「少彦名（天火明）がいない今、私以外にこの国を治める者などいるだろうか」

暫くすると、火明（火照）が仰々しく飾り立てた王船の帆柱に光輝く鏡を掲げながら、出雲の杵築湊に入つて来た。王船には、数十枚の呉鏡が火瓊瓊杵の神像として奉られていて、そこに妃におさまる予定の天道姫（葦原中つ国系の姫）も乗り込んだ。ついで天（日）勢、女神大山祇神一門の溝クイ耳、住吉族・坊津小千族・吾田隼人らの船がひっきりなしに入港してきた。火

明は稲佐浜に上陸すると、大己貴を呼び出して責め立てた。

「この彦火明は中つ鏡・辺つ鏡など瑞宝十種だけでなく、天鹿兒弓・天羽羽矢も奉じて、大倭に天降って行くところだ。いずれ日本家を興して倭王に昇り、新王朝をうち立てる身にある。大己貴はこれまで同様、火明の育ての親として大物主の任務を全うせよ」

ヒミコは大己貴の大言壮語を耳にして「まだ政に未練がある」と察知すると、火明を出雲に立ち寄せたのだ。大己貴も、彼が火明と名のつた上に、瑞宝十種や天鹿兒弓・天羽羽矢を振りかざしたとあっては、ひたすら平身低頭する他になかった。

後に、火明は大己貴を連れて丹後宮津に到ると、豊受姫や日子坐王親子の家を訪ね歩いた。彼がそこに逗留している間、豊受姫は夫の天鹿兒山や長子・饒速日に先立たれた不幸を長々と嘆いて聞かせたり、日子坐王も孫娘四人が天火明（二代垂仁）と離縁して実家に戻ってきた不運を愚痴ったりした後に、二人揃ってこう頼み入れてきた。

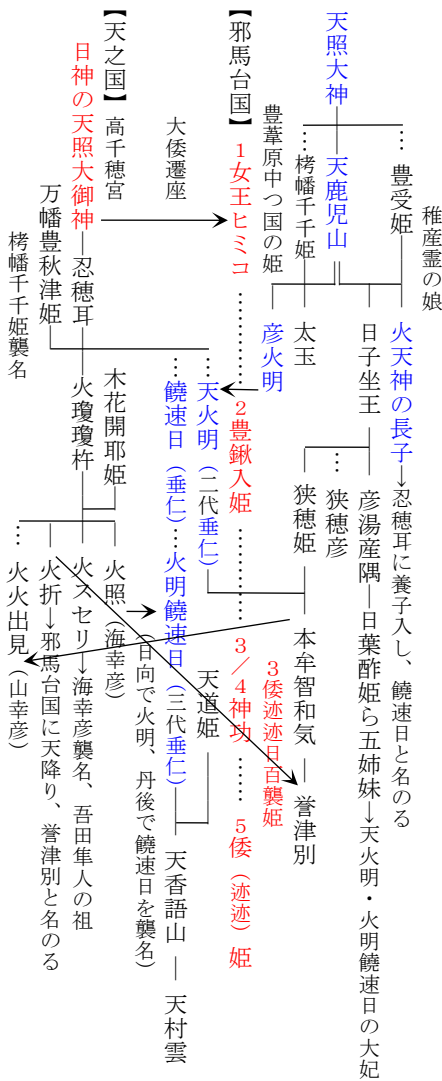
「豊葦原瑞穂国に天降った我が兒・饒速日を襲名して下され。そなたの兒も天鹿兒山（饒速日の父親）や天叢雲（同じく祖父）を襲名されるが良からう。

これを縁に、義弟となる日子坐王（饒速日の弟）一門を良しなに。さすれば、当家はどこまでも饒速日について行く」

そこで、火明は火明饒速日（以後、饒速日とも呼ぶ）と名を改めた後に、宮津を発つて河内の草香邑（生駒山東麓）に天降り、その地にあつた葦原中つ国一門を日下（日下）家と改名して抱え込んだ。それ故、この家は草香の日下とも日下とも呼ばれることになる。

その後、大和川をさかのぼって纏向入りした彼は、宮殿に参内してヒミコとの接見を済ませると、鳥見に移って日本家を興した。と同時に、五十狭茅を襲名して活目入彦五十狭茅と語り、饒

速日や天火明の家督・祭器の一切合切を手にした。これで、日本と日前は互いの嫡子を取り替え
たことになる。それは、二四七、八年のことだ。



『日本書紀』、「その後には少彦名命、行きて熊野の御碕に至りて、遂に常世郷に適しぬ。・・
自後、大己貴神、独り能く巡り造る。遂に出雲に到りて、興言して曰わく、『それ葦原中つ
これよりのち
国は、本より荒びたり・・然れども吾已にくだき伏せて・・』、
「時に神しき光海に照らして、忽然に浮び来る者あり。曰わく、『もし吾在らずば、汝何ぞ能
くこの国を平けましむや。吾が在るに因りて故に、汝その大きに造る績を建つこと得たり』」

自後、大己貴神、独り能く巡り造る。遂に出雲に到りて、興言して曰わく、『それ葦原中つ
これよりのち
国は、本より荒びたり・・然れども吾已にくだき伏せて・・』、
「時に神しき光海に照らして、忽然に浮び来る者あり。曰わく、『もし吾在らずば、汝何ぞ能
くこの国を平けましむや。吾が在るに因りて故に、汝その大きに造る績を建つこと得たり』」

という。大己貴神問いて曰はく、『然らば汝は是誰ぞ。・今何処にか住まむと欲う』とのた

まう。対えて曰わく、『吾は日本国の三諸山に住まむと欲う』という。これ、大三輪の神なり』

【海部氏系図勘注系図】始祖彦火明——見天香語山——孫天村雲——

『但馬故事記』、「饒速日は勅と十種の神宝を奉じて妃の天道姫・数多の隨身を率い、丹波の真名井原に天降った。そこで豊受姫からもらった五穀や桑の種を植えついたり、井戸を掘ったり、田畑を開いて蚕を育てたりした。後に、饒速日はそこから河内生駒に天降った。天道姫が丹波で産んだ児を天香語山、そのまた児を天村雲という」

「神武紀」、「饒速日命、天磐船に乗りて、太虚を翔行きて、是の郷を睨りて天降りたまうに及至りて、故、因りて目けて、『虚空見つ日本の国』と曰う」

大倭での彼は、かつての那珂つ国王や饒速日と同様、瑞宝十種を奉じながら、「もし痛むところ有らば、この玉つ宝をして、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十と云いて振るえ。ゆらゆらと振るえ。このごとくすれば、死人も返生りなむ」という呪文を繰り返し唱えることで、不老不死をひたすら願う神国づくりに入れ込んでいた。

暫くすると、彼は葦原中つ国系の鳥見屋姫（御炊屋姫を襲名した三炊屋姫）とも婚約を交わした。この縁組によつて、兄の鳥見長スネ彦（長スネ彦を襲名、鳥見彦）は大抜擢されて日本將軍に駆け昇り、日本家を懸命に守り抜くことになる。落ち目にあつた大倭家は新王朝に全面的に服従を誓うとともに、大日本家と改名してみせた。

その後の饒速日は、日本家・大神家の家長を兼ねて日本大物主大神と語り、権力を欲しいまま

にした。大己貴も大神大物主となつて政の采配を振るつた。ここに天地からなる国体が整つた。この饒速日と大己貴は、大神神社（桜井市）の祭神に納まつている。大神神社の祭祀を通して、彼らと三輪族の関係についても知つておこう。

大神や三輪の神が蛇神であることは皆の知るところだが、大神神社は元旦の真夜中に饒道祭（にようどうさい）と呼ばれる盛大な火祭りもとり行う。祭りでは、松明を持った一団が闇の拝殿と末社を走り回り、火種を貰つて家路を急ぐ人の波が火の川のようになつて延々と続くという。この祭りが火神の天火明や火明饒速日に関係するのは明白だ。つまり、大神神社は水神を祀ると同時に火神も祀っている。これが水穂（水火、瑞穂）国と呼ばれる所以だ。

神社から三輪山に登る山道脇には数々の磐座が点在している。磐座は大きくは三群から成つていて、山頂に近い順に、奥津磐座（おくついわくら）・中津磐座（なかつ）・辺津磐座（へ）と呼ばれ、それぞれ大神神社祭神の大物主大神（三輪大物主、倭大物主（やまと）、大神大物主、日本大物主大神（やまと））、大穴持・大己貴、少彦名を祀る。その中で、奥つ磐座は巨石の周りに多数の石を円形に配置した環状列石に似ている。

☆本書では、倭大物主は天照大神、大神大物主は大己貴、日本大物主大神は火明饒速日、少彦名は天火明と見ている。

（ここから、天照大神（倭大物主）とヒミコ（日神）の祭祀の違いについて、考えてみた。

「天照大神は磐座を依り代に見立てて、御霊の再来を祈っていた。彼はこの磐座信仰を大衆に広めようと奔走したことで、磯部の石神（いそのがみ）（石上）の名で慕われてきた。

この磐座と仏教の墓石とは、見かけは似ているが、祀り方や信仰の拠り所は大きく違つていた。磐座崇拜は御霊の再来願望が強いことで、神がかり的なのだ。

これに対して、元来、日の神である彼女は死者の冥福祈願に重きを置き、こう考えてきた。『土を盛ってその表面を石で覆った墓（石葺き古墳）は、仏法を信じて昇天した天之国一門の常世だ。この墓に眠る者こそ、仏陀の唱える来世、即ち天上での安らかな暮らしに加えて、仏や観音の姿と化して地上への垂迹が許されている』

この考えの下で、ヒミコは仏塔もじりの古墳を大倭に築かせようとしたが、実績はとんとなかった。そもそも古墳の前身である墳墓は、出雲や吉備で面々と続いてきて、これを押し進めたのが大己貴だった。その彼が日神に随伴して大倭に移るや、出雲・吉備に由来する巨大な古墳が、大倭に突如出現した。一方で、出雲や吉備の墳墓造りは停滞した。ここに着眼すれば、古墳づくりの立役者が大己貴と気づいて然るべきだ。

●女王の伊勢遷座

二四八年、齢八十を過ぎたヒミコは、政権移譲の手はずを整えてから常世の伊勢に遷り住み、長年の夢だった神国・常世づくりの仕上げにかかりたいと発起した。即ち、大木の生い茂る森にあつて、清流のせせらぐ水辺を天上に昇り降りできる聖地に見立てつつ、天照大神がいつ何時に天降つて来ても自由にくつろげる地上の宮殿をこしらえておくこと、同時に夫を慕って集まってくる天神地祇や浮世の仙人らと楽しげに遊べる神仙郷も整備しておこうと奮い立ったのだ。

これに先立ち、ヒミコは鏡作郷の名工らを集めて、真経津鏡を型にとった神鏡を鑄造させていた。それができあがるや、饒速日に十握剣も天（水）軍も添え与えて詔した。

「この十握剣は、経津主とも称した高皇産霊が女帝（天常立）と天下を守り抜いた鉄剣だ。豊葦原中つ国も伊都家も日隈も、この剣に末代まで服すると誓った。

これを踏まえた上で、これなる鉄剣と鏡を天照大（御）神二神の御霊として敬うように。私亡き

後は、これを神璽として倭王に立ち、次の女帝と天下を守り通せ。あわせて、天の国が身上としてきた鉄器づくりの普及も図れ」

天の国嫡流のヒミコは、日本朝に対しても倭奴国王朝再現や鉄器づくりの普及を迫ったわけだ。

さて、ヒミコの権力委譲が完了すると、随行者する者たちも決まった。伊勢までの道案内に猿

たけぬなかわわけ

田彦の子孫、警護役に武淳川別ら五大夫、また官司として中臣氏（天児屋子孫）が任じられた。

それまでのヒミコの身辺世話は、十三歳の豊鍬入姫が専任していたが、その役目はもつと年下の倭姫に託された。それは、ヒミコが豊鍬入姫を宗女（跡継）に指名したことにある。

準備が万端整うと、天叢雲剣を奉じた行列は、天照大神御霊が安らかに鎮座できる聖地を求めて上之宮を出立した。その後、ヒミコは美囊まで足を伸ばして、新たに服従を誓った尾張家の重

臣らに見えた。その際、饒速日の幼子・天香語山かこを家長に送り込んで、一同の期待に応えていた。

ヒミコはそこから南下して、伊勢の二見を目ざした。そこで、猿田彦の冥福を祈るためだ。生前の猿田彦は日神の天降りに先立って伊勢に赴き、神国・常世づくりの下準備に走り回っていた。ヒミコは二見で猿田彦の霊を慰めた後、飽きることなく海を見つめながら、倭姫に語りかけた。

「神々がそよ風と共に訪れる伊勢国は、常世からの浪が幾重にも押し寄せて来る国だ。ここは邪馬台国の東端に位置するが、まことに美しい国だ。私はここで夫と一緒に永久に暮らしたい」

その後、ヒミコは五十鈴川の上ほとりに打つてつけの聖地を見つけると、願い事を祈願する祝宮と

夫がくつろげる宮殿をこしらえながら、檜御柱と天叢雲剣の前に跪いては夫の再来を祈っていた。その想いが天に通じたのか、伊雑宮に居た頃の天照大神が天降ってきた瑞兆が見られたという。

以来、五十鈴宮、齋宮いわいのみや、磯宮、渡会宮と呼ばれ、天照大神が初めて降臨してきた処とされた。

「垂仁紀」、「天照大神を豊耜入姫命より離ちまつりて、倭姫命に託けたまふ。ここに倭姫命、大神を鎮め坐させむ処を求めて、菟田の筱幡に詣る。さらに還りて近江国に入りて、東の美濃を廻りて伊勢国に到る。時に天照大神、倭姫命に誨えて曰わく、『この神風の伊勢国は、常世の波の重浪帰する国なり。傍国のうまし国なり。この国に居らむと欲う』・・一に云わく、天皇、倭姫命を以て御杖として、天照大神に貢奉りたまう。

故、大神の教の随にその社を伊勢の国に立つ。因りて斎宮を五十鈴川の川上に興つ。是を磯宮という。則ち天照大神の初めて天より降ります処なり」

☆不死身となった黄帝は、崑崙山（黄河源流にあつて、不死の仙女西王母の住むという聖山）に莊嚴華麗な地上の帝都を設けて、仕事の合間をみては天上から天降つてきて浮世の仙人らと神仙遊びにふけていた。

ある時、ヒミコは倭姫に向かつて、

「私は檜御柱の許で高皇産霊を祀り、次に天叢雲剣でもって天照大神、続いて磐座の前に跪きつつ磯部の石神も祭祀してきたが、豊受姫も丹後で御饌津神（豊受皇太神）と豊受大神を奉祭してきて、夫の御霊を別々に祀っているのが侘しくなった。そのせいか、近ごろは食事もろくに進まない。

どうか、等由気大神（豊受姫）を伊勢に呼び寄せ、ともに祭祀できるよう図らつて欲しい」

と頼み入れた。だが豊受姫はすでに他界していたのか、伊勢に参内することはなかった。この姫こそ、雄略天皇によって伊勢神宮に祀られる豊受皇太神の養女、つまり天孫と一緒に吾田に降臨する登由宇気神であり、『但馬故事記』に登場する豊受姫なのだ。